

第五福音書とも呼ばれるイザヤ書を、今日から皆さんと一緒に読んでいきます。

「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻」(1)。アモツがどのような人物であったのかは分かりません。しかし一般的にはユダの王アマツヤの兄弟であったと伝えられています。ある程度裕福な生活をして、神殿や宮殿にも出入りすることが許されていたのではないのでしょうか。

「これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」(1)。つまりイザヤはBC740～690年頃の約50年間に活躍したと言われています。この間に北イスラエルはアッシリアに滅ぼされ(BC720)、南ユダがバビロンに滅ぼされるのはBC585年です。イザヤの預言はイスラエルの滅び(1～39章)、捕囚からの解放(40～55章)、祝福(56～66章)にわたります。バビロンから解放する者として、主が油を注がれたキュロス(45:1)と具体的な名を記して預言することから、後世の時代の人が預言したとして、第二イザヤ・第三イザヤがいたと主張されます。このことは改めて議論することとなるかと思いますが、誰が預言したにせよ、主なる神がイスラエルに対して預言された言葉として、預言書から読んでいかなければなりません。

主はイスラエル(北イスラエル王国だけでなく南ユダ王国も含む)に対して呼びかけ、イスラエルの罪を指摘されます(2)。

しかし主は、ただイスラエルに罪を指摘し、裁きを行うことを警告するものではありません。主は、イスラエルを滅ぼし尽くすことなく、娘シオンを、残されたことをここで宣告されます(8)。主の憐れみがなければ、ソドムやゴモラのように滅ぼし尽くされていたのだと語られます(9)。

イスラエルは主を信じ、主を礼拝し、主に献げ物を献げます(11)。しかし主は残りの民とされたイスラエルの姿を見ておられます。主の恵みを忘れ、形だけの神礼拝、生け贄を、主は喜ばれることはありません。主は形ではなく心を見ておられます。

そして「論じ合おうではないか」と主は言われます(18)。論じ合うとは、目と目を合わせて立つことです。リモートではできないことです。これは、私たちが主を礼拝するということです。

私たちは、礼拝に出席していれば良いのではありません。説教を聞き、理解していれば良いのではありません。献金を献げ、一生懸命に奉仕を行っていれば良いのではありません。あなたの行い・言葉・心の中をすべて知っておられる主なる神の御前に立つことです。そして主の御前に立つ自らの姿を顧みることです。

あなたが罪を犯していたとしても、主の御前に立ち、自らの姿を明らかにし、罪を受け入れるならば、主が無罪と宣言し、神の子として救いに入れてくださることを宣言してください(18)。

しかしイスラエルの民はどうでしょうか? 主はイスラエルを遊女だ・人殺しだと語ります(21)。雅歌を読み進んできた私たちにとって、主が「イスラエルのことを遊女だ」と語るのには、心に響きます。

そして「災いだ

わたしは逆らう者を必ず罰し

敵対する者に報復する。……

不純なものをことごとく取り去る」と語ります(24-25)。主の御前に立ち、主と論じ合い、自らの罪を悔い改める者には、罪の赦しを宣言してくださいますが、主の御前に立つことなく、主から目を背け続ける者に対して、主は裁きを宣告されます。

そして「背く者と罪人は共に打ち砕かれ主を捨てる者は断たれる」(28)。

「論じ合おうではないか」(18)とお語りになった主は、「シオンは裁きをとおして贖われ 悔い改める者は恵みの御業によって贖われる」(27)ともお語りくださいます。

主による完全なる裁きが宣言され、「恐ろしい神」であると思う人たちがいます。しかし、本来の私たち人間は、自らの罪の故に滅び行く者として生まれ、死と裁きを免れることができなかった者でした。滅び行く私たちに対して、主は、論じ合い、主の御前に立つことを求めておられます。自らの姿を顧みることを求めておられます。

そして主の御前に立ち、自らの姿が明らかにされ、主への信仰を告白するとき、主は罪の赦しをお与えくださいます。そのために神の御子が人となられ、十字架にお架かりくださいました。主の愛と恵みに、感謝と喜びをもって、日々歩み続けたいと思います。

1章において、イスラエルに罪を示された主なる神は、「論じ合おうではないか」(1:18)と語られました。自らの罪を受け入れ、主の御前に立つことが求められています。

そして主なる神は、イスラエルの民に、神による救いに与ることによって与えられる終わりの日について語り始めます。

「終わりの日に／主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高くそびえる」(2)。具体的にはエルサレムにあるシオンの丘を示しています。終末的な出来事であるキリストの十字架の御業は、エルサレムにあるゴルゴタの丘において成し遂げられ、ここにすべての人の目が集中します。

「主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る」(3)。

神の預言は、キリストによって与えられ、シオンであるエルサレムから、使徒たちにより全世界に広められます。

つまり主が預言で語る「終わりの日」は、メシアである主イエスの来臨と十字架の御業により、すでに始まっています。ですから私たちは、新約の現在のことを「終末の時代」と語ります。

そして有名な4節の御言葉に続きます。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」。実際にキリストが再臨して、終わりの日に最後の審判が行われるとき、サタンは滅び、サタン・罪によって人にもたらされていた争いや武器は不要となり、主の恵みを祝福する歩みが始まります。このときすべての者は、主の光の中を歩み、神の国に招かれ、主を礼拝し、主を誉め称えるのです。

イザヤ書において「終わりの日」と言う言葉は、2:2にしか出てきません。そして「主の日」も2:12と共に13章6, 9節と3回しか出てきません。その代わりに、イザヤを始め預言者は、「その日」と繰り返し語ります。終わりの日は、神を信じる者にとっては祝福が完成する日ですが、イスラエルの民に対しては、罪に対する裁きがもたらされる日として示されるからです。

「あなたは御自分の民、ヤコブの家を捨てられた」(6)と宣言します。主は、ヤコ

ブの家であるイスラエルの民は、神の国に入ることができないことを宣言されます。彼らは、カナンの原住民と混血し、異邦人の代表であるペリシテ人のように、占いに頼り、経済中心となり、武器の力を誇り、主なる神から離れて偶像崇拜を行います。主なる神は、このようなイスラエルの民をお赦しになることはありません(9)。

そして、主はそのような人間を卑しめられ、だれも低くされます(9)。ただ低くされるのではなく、主の裁きが完全に・徹底的に行われます。

この裁きが行われる「その日」である「終わりの日」が来るため、それまでに自らの罪を顧み・悔い改め、主の御前に信仰を言い表すように語られます。

そして、主なる神の御声に聞き従い、主を信じて歩む民に対して、「隠れよ」・「避けよ」と繰り返し語られます(10・21)。

終末の時代における主の裁きがヨハネの黙示録において語られています(8・9章)。天使がラッパをふくことにより、全体の三分の一が裁かれていきます。何が起きているのか理解した上で、裁きから逃されるために、「隠れよ」と語っています。

そしてさらに、「主の恐るべき御顔・威光の輝きとを避けよ」と語られます(10・21)。旧約の民、モーセも燃える柴(出エジプト3章)において、主の顕現に対して、直接、主の御顔を見ることを恐れて顔を覆いました(3:6)。旧約の時代に語られた預言と、新約の時代に生きる私たちとは、ここで違いが生じます。キリストが十字架に架かれ、死を遂げられたとき、神の聖所を分けていた幕屋は裂け、神が聖霊により臨在される時代を迎えました。そのため、私たちキリスト者は、礼拝毎に主の御前に立ち、主による救いの宣言を御言葉により受けることが求められています。

主は、預言者イザヤをとおして、メシヤによる救いととも、終わりの日であるキリストの再臨と神の国の完成の時を預言しています。キリストの来臨と十字架の御業は成し遂げられましたが、終わりの日は、私たちにとっても、まだ実現していない、約束された出来事です。だからこそ私たちは、自らの姿を顧み罪を悔い改め、主への信仰を言い表すことが求められています。

イザヤ書2章では、「終わりの日」(2)に現れる神の御国の完成する天国の姿が語られた後、「その日」(2:11, 17, 20)に起こる裁きについて語られてきました。3章でも、終末におこる出来事が語られていきます。

主なる万軍の神は、民の指導者を奪い、パンや水を断ち、人々が生活できなくすると語ります(1)。そして主が取り去る「頼みとなる者」が列挙されていきます(2-3)。国の安全を守る「勇士と戦士」、国を治める「裁きを行う者」、主なる神に仕える「預言者」と「長老」、さらに「占い師」偶像に仕える者も含まれます。軍事・政治・主なる神に仕える者・偶像に仕える者のすべてが取り去られます。

そして主なる神は「若者を支配者にし」ます(4)。若くとも有能な人はいますが、ここでは人の上に立つ訓練も行わず、何を行えば良いのか理解していない若者が支配者として立てられます。それも、主なる神の支配において行われます(参照: 12)。

このとき国や社会には混乱が生じます。分裂を引き起こし、虐げ合います。支配者は自己追求を行い、時代間の溝が深まり、不適格者が上に立つこととなります(5)。

そのため指導者・為政者は、人々から尊敬されることはなく、公共性は失われ、秩序は乱れ、彼らは自らの責任を果たさなばかりか、責任を取ろうともしません。

社会崩壊の何よりの原因は、主なる神と敵対し、主の御言葉に誰も聞き従わなかったためです(8-9)。裁きの対象者は、宗教的指導者である預言者や長老も含まれます。

日本は「異教徒が政治を司っているから仕方がない」ではすまされません。社会が腐敗した中、なおもキリスト者が、自らの罪の悔い改め、主への信仰をもって主に仕えているかが問われています(10)。つまり、イザヤは「その日」の裁きを延々と語りますが、主の狙いは、こうした世の中において、主により救いに入れられたキリスト者が、主の御言葉に聞き従い、自らの罪を悔い改め、社会の罪に対して警告を發し、神の民として生きることを求めています。

つまり預言書を読むとき、「その日」の裁きについて語り続けますが、そうした中にある、主から与えられる恵み・光をキャッチし、読み解くことが求められます。

主はすべての者に語りかけます。主の御声に聞き従おうとしない者に対する裁きも必ず成し遂げられます。「主に逆らう悪人は災いだ。彼らはその手の業に応じて報いを受ける」(11: ウェストミンスター信仰告白33:2)。

人々が主なる神と敵対した結果、社会の混乱がもたらされました。そのため、主なる神が民を裁きます。教会の指導者である長老、そして国の為政者としての支配者たちも主に裁きを受けます(14-15)。

15節までは、イスラエルの男社会に対する裁きが語られてきましたが、女に罪がないではありません。主の裁きは、女性にも及びます。16・17節で「シオンの娘たち」(16・17)という言葉で語られます。「高慢」さ。続く「首を伸ばして歩く」は、高慢で高ぶった様子を語っているのでしょうか。「流し目を使い」、「気取って小股で歩き」、「足首の飾りを鳴らしている」とは、性的な誘惑に満ちた行動です。

女性が適度に着飾ることは許されるでしょうが、過度な、あるいは性的な誘惑をするような服装などは禁じられています。

「主はシオンの娘らの頭をかさぶたで覆い彼女らの額をあらわにされるであろう」(17)。

「かさぶた」は、皮膚病のことを表し、「額をあらわにされる」とは、はっきりとしまませんが、「プライベートな部分を露わにする」意味が込められています。

そして、「その日には、主は飾られた美しさを奪われる」と語ります(18)。足首の飾り、額の飾りに始まり、ターバン、ストールなどの女性が着飾るものすべてが主によって奪われます(18~24)。

そして、主の裁きが男性にも女性にも及ぶことが語られていきます(25・26)。主なる神は、男性・女性に関係なく、権威を持っている者もそうでない者も、キリスト者にも、まだ信仰をもっていない者にも、主はすべての者に対して、「終わりの日」について語りかけておられます。

すでにキリスト者とされた私たちは、改めて自らの姿を主の御前に顧み、罪を悔い改め、信仰を告白し、主の御言葉に聞き従うことが求められています。そして、主がイザヤをエルサレムとユダに遣わされたように、私たちキリスト者は、今の時代、世に遣わされています。

「その日」である終わりの日には、サタンとの最終的な戦いのため、1/3が滅ぼされます(黙示録8章参照)。こうした争いするとき、女性や子どもたちにも犠牲者が出ますが、兵士として戦いに出る男たちの方が遙かに犠牲者は多いのです。4:1は、こうした状況を語っています。3:18~において、女性が罪の懲らしめとして、醜い姿となることが語られていきますが、女性の多くは、なおも生き残ることが語られています。

イザヤ書を含む預言書には、終末を象徴する言葉が語られています。「終わりの日」のことを「その日」と繰り返します。そして4章において「残りの者」が出てきます。

「残りの者」は、預言書において語られていますが、聖書全体において、神による救い・恵みの契約で貫かれています。

エジプトの指導者となっていたヨセフに、ヤコブの他の息子たちの前で正体を明かす場面において、イスラエルが神の民として「残りの者」とされたことを語ります(創世記45:7)。

イザヤ10:20-23では滅びる者と残りの民、つまり救われる者があることを語ります

(参照：ウェストミンスター信仰告白3:1)。この御言葉がローマ9:27で引用されます。主なる神は、アブラハムを祝福し、海辺の砂のように多くすることを約束されましたが、主に従い、主を信じて歩まなければ、神の救いに与ることはできません。そうした中において、主は真に霊的な神の民をお立てくださいます。彼らは一握りの人間なのかもしれませんが。しかし、この残りの者の内に入れられたキリスト者は、主による救いに与ることが許されます。

そのため、現在、教会に来る人が少なくなり、弱体化していますが、私たちは悲嘆する必要はありません。私たちにとって大切なことは、残りの民である真のキリスト者が教会に集い、一人ひとりが主の御言葉に固く聞き従うことです。そしてどのような試練にあってもそれを乗り越える信仰の養いに与ることです。

「生き残った者にとって、主の若枝は麗しさとなり、栄光となる」(2)。「主の若枝」とは、メシアとしてのイエス・キリストを指し示しており、生き残った民はキリストにより救いに入れられます。

さらに、「彼らはすべて、エルサレムで命を得る者として書き記されている」(3)と語られています。黙示録で、救われる民に、神の刻印が押されていることが語られますが、その数が144,000人です(黙示録7章)。ここでは「彼らはすべて」とあります。主が救いへと導いてくださる者は、皆が救われ、永遠の生命を得ることができるのです。ですから、信仰を告白し、洗礼を授かった者は、救いから漏れることはなく、神の恵みの契約の中に入れられ、安らぎをもって信仰生活を送ることが許されるのです。

3:16以降「シオンの娘ら」について言及されてきました。彼女たちも罪の故に神の裁きに遭いますが、神の国が完成することにより、汚れが洗い清められます(4)。罪を犯したため主により懲らしめられ、もう救われられないということはありません。むしろ私たちも皆、罪を犯し、主の裁き・懲らしめを受けなければならない存在です。それでもなお、主は、キリストの十字架の御業をもって、私たちの罪を赦し、そして救い、清めてくださいます。

そして5・6節では、出エジプトの荒野における主の御業を彷彿させる言葉が語られます(参照：出エジプト13:21-22)。

主は、私たちキリスト者が生き残り、天国に入るまで、導いてくださいます。ここでは天蓋であり、仮庵となっていますが、旧約の幕屋・神殿であって、新約に生きる私たちの教会です。地上の教会は、天国における教会を目指す途上にある教会です。しかし教会において御言葉が語られ、信仰が養われ、祈りをもって主と共に歩むとき、私たちは様々な試練や艱難を乗り越えることが許されます。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます」(Iコリント10:13)。

そして主による救いに与るキリスト者は、天国における栄光に満ちた教会へと凱旋することが許されています。主は私たちキリスト者を、残りの者としてお覚えくださり、天国に凱旋させてくださいます。感謝と喜びをもって、主に従っていきたいものです。

預言者の働きは、イスラエルの民に、悔い改めを迫り、主への信仰に立ち戻ることを語ることで。しかし、イザヤ書5章では主による裁きしか、語られていません。

さて4章では、「その日」である「終わりの日」に与えられる神の民の救いが語られていました。主なる神は、イスラエルの民が罪を悔い改めて、主による救いに与ることを願っていました。

そうしたことを、5章では、ぶどう畑でぶどうを育てる主人に例えて語り始めます。主なる神は、ぶどう畑を丁寧に整備し、多くの立派なぶどうがなるように準備します(2)。アブラハムに始まり、イスラエルを神の恵みへと導き、出エジプトの結果、約束の地カナンに素晴らしい土地をお与えくださいました。

しかし現実には、「実ったのは酸っぱいぶどうでありました」(2)。主が求めておられたのは「良いぶどう」であり、自らの罪を悔い改めて主に従い、主の恵みに生きることでした。しかし彼らは、主なる神を忘れ、偶像を崇拝し、放縦な生活を送っています。主は、イザヤが預言者として遣わされる今のイスラエルの姿を示されます。その結果、主は「わたしはこれを見捨てる」と、主は裁きを宣告されます(6)。

そしてこのように語ります。

「主は裁きを待っておられたのに

見よ、流血。

正義を待っておられたのに

見よ、叫喚(きょうかん)」(7)。

「裁き」と訳され、この部分が理解できなくなっていますが、他の聖書では「公正」と訳されています。「裁き」と訳したのは、正しい裁きをもって、神の民が救われることを主が願っていたことを語ろうとされています。公正・正義とはかけ離れた流血や叫びのある殺し合いが行われていたのです。

続けて、「災いだ」と6回繰り返され、イスラエルの罪が指摘されます(8-24)。

①「お前たちは余地を残さぬまでに

この土地を独り占めにしている」(8)。

第八戒「盗んではならない」の違反であり、ウ大教理問142では「不正な土地囲い込みと住民追い立て」の罪であると指摘しています。その結果、主の裁きとして収穫がまったくとれなくなります。

10ツエメド (25,000㎡≒160m×155m) のぶどう畑に、1バト(230)しかぶどうが採れません。1ホメル(2300)の種から、1エフェ(230)しかぶどうが採れません。

②彼らは酒に溺れ、主の御業、主の栄光を顧みることがありません(11-17)。

「それゆえ、陰府は喉を広げ

その口をどこまでも開く」(14)。

と語られ、主なる神の高さが語られる一方(16)、イスラエルの落とされる罪の深さを語られています。

③④3番目(18-19)と4番目(20)は対をなします。罪・咎に生き、主なる神がそれを正当化することを求めます。

⑤自らを知者・賢者とうぬぼれ、自分の立ち位置を見失った状態を語ります(21)。

⑥賄賂を取って悪人を弁護する、明かな第九戒「偽証してはならない」違反です(22)。

こうしたイスラエルの現状に対して、主は裁きを行い、焼き尽くすと語ります。これらの裁きは、主の教えを拒み、悔った結果です(24)。

主なる神の裁きは、完全に行われます。第一に主が御支配になる自然(地震(25)・災害(30))をもって裁きを行われます。

また、主なる神は異邦人を用いて、イスラエルを裁きます(26-29)。具体的には、北イスラエルを裁くアッシリアであり、南ユダを裁くバビロンであり、さらに捕囚から解放するために立てられるペルシャ(キュロス)のことを語っています。

北イスラエル、南ユダが滅びるのは、異国の軍隊をもって滅ぼされるのですが、それらは主なる神が摂理をもって働き、異邦人を用いて、イスラエルの民を裁かれます。

イザヤ書では、1～4章において「終わりの日」に行われる主の裁きと救いの完成を語りつつ、この5章において、現状においてはイスラエルは完全に主の裁きに遭う存在であることを語ります。特に4章において、主による救いの祝福が示されつつも、現状においてはイスラエルの民は主に背反している状況です。

それを受けて、主はイスラエルの民に預言者イザヤを遣わし、イザヤを通して主の御言葉に耳を傾けるように語りかけようとしてされています。

エレミヤ書・エゼキエル書などの預言書では書簡の冒頭に、預言者の召しが語られます。しかしイザヤ書では6章で、イザヤの召命について語ります。このことは、イザヤが他の預言者とは異なった召命を受けたことと関係しています。

イザヤ書は、1～5章でイスラエルの民に、罪を指摘し、悔い改めて信仰を告白することを求めています。しかしイスラエルの民は、主に背き続け、その結果として滅びを避けることができません(5章)。

そうした状況の中、イザヤは主からの召しを受けます。ユダの王ウジヤが死去し、ヨタムが王になるBC742年です(1)。720年に北イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、585年に南ユダがバビロンに滅ぼされ、捕囚の民とされます。北イスラエルが滅びる20年以上前に、イザヤは最初の召命を受けたこととなります。

イザヤの召しは、イザヤが天の御座を見ることから始まります(1)。これがどのような状態でイザヤが天の御座を見ることができたのか、ここでははっきりしません。御座にはセラフィムがいます。セラフィムとは、天使のような存在で、神の臨在を守護するものと考えられます。そして天では主を誉め称える讃美がなされています(3)。

栄光に満ちた主に出会ったイザヤは、戸惑い、滅びを覚悟します(5)。そして主の御前に自らの罪が示され、悔い改めに導かれます。主は、このイザヤの言葉を罪の悔い改めと信仰の告白として受け入れてくださいます。そしてセラフィムにより、罪の赦しが宣言されます(7)。「セラフィム」とは、「燃える」という意味の言葉であり、主からイザヤの罪の赦しと召命を行う働きが、主から与えられたことを示しています。

主からの招きがあったとき、イザヤは「わたしを遣わしてください」と答えます(8)。

主による信仰の呼びかけ・召命が行われたとき、その人は、自らの罪を悔い改め、信仰を告白し、主への奉仕を行う者へと、押し出されます。つまり私たちは、奴隷のごとく神を信じ・奉仕を行うことが命令され、それに嫌々聞き従うのではありません。

100%主なる神の御業ですが、同時に100%私たち自身が自らの意思で行動します。神の御計画・摂理は、私たちの側では神か

らの働きを感じつつも、同時に操り人形や奴隷のように、強いられて行うことではなく、主から与えられた恵みとして受け入れ、信仰を告白し、奉仕を行うのです。

しかしイザヤは、他の預言者とは違いがありました。通常の預言者は、イスラエルに罪を指摘し、悔い改めを迫り、信仰を告白して、主に従うように語ります。現在の牧師・説教者も同様です。しかしイザヤはかたくななイスラエルに対して、耳を鈍くし、目を暗くするように語るのです(9-10)。

牧師でも同じですが、悔い改め信仰を告白する者が、一人でも二人でも出るからこそ、その働きを継続することができます。しかしそれが無いのは、非常に苦しいです。

しかし主なる神は、罪の故に滅び行くすべての者を救われるのではありません。結果として、その中に入らない人もいます。彼らは、自らの罪の故、罪の刑罰として、死に滅ぼされていきます。

そのことを、ウェストミンスター信仰告白5:6においても語っていますが、彼らは、自らが滅んでいくことに対して、知らずに滅んでいくのではなく、主なる神から罪の悔い改めと信仰を求められながらも、それを拒否し、滅んでいくのです。

イザヤは、そうした働きに導かれたのです。現在、教会に来る人は少ない、減少傾向です。それでもなお、私たちは福音を語り続けることが求められています。

主は、北イスラエルをアッシリアの手に渡し、南ユダをバビロンの手に渡されます。イザヤは南ユダが滅ぼされる直前まで、50年以上にわたって、預言し続けることが求められます(11)。非常につらく、空しさも感じる働きです。しかし、主は裁きに対して慎重です。すべての者たちに悔い改めを迫り、その上で、裁きに臨まれます。

主の裁きは非常に厳しく、これがバビロン捕囚の現実です(13)。残りの民とされるイスラエルですが、ほとんどの人々が主による裁きにより、焼き尽くされます。

罪の故にイスラエルの民は焼き尽くされますが、残される民が起こされます。これがダビデの子の系図であり、イエス・キリストが約束されています(参照：7:14)。そしてキリストの十字架の贖いにより、神の民の救いが約束されています。

南ユダ王国アハズの治世 (BC735-715) に、アラムの王レツイン、北イスラエルの王でありレマルヤの子ペカが、ユダを攻撃しようとしています (BC733、アラム-エフライム戦争：参照・列王下16:1-5)。戦争が始まるにあたり、アラムとエフライム (=北イスラエル) が同盟したという知らせが、アハズに伝えられ、アハズは動揺します(2)。

イザヤは息子を連れてアハズの所に行くように主に命じられます。息子の名は、シエル・ヤシュブ「残りの者が帰って来る」と言う意味です(3)。聖書において名前は大切であり、イザヤが息子の名に、主のメッセージが込められています。

またイザヤがアハズと会うのは、「布さらしの野に至る大通りに沿う、上貯水池からの水路の外れ」です(3)。「布さらしの野」とは、現在のユダの置かれた状況です。貯水池からの水路があり、命の水が絶え間なく流れています。まさに主なる神からの恵みが与えられることを物語っています。

アラム王とイスラエルの王の力が大きくても、彼らの野望は実現しないと、主はアハズに語り(4-7)、目の前にある恐怖を恐れるのではなく、主の約束を信じるように語ります。そして「エフライム (北イスラエル王国) は消滅」します。実際、BC720年に北イスラエルはアッシリアに滅ぼされます。

そして主のしるしである御言葉に聞くように語ります(11)。主は陰府に落とすことも、天に上げることもできるお方です(11)。

しかしアハズは「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」と答えます(12)。一見すると正しいようですが、アハズは、自分を主人とし、主を試しています(13、参照：ウェストミンスター大教理113)。主が「しるしを求めよ」(11)と語られているのは、「主を信じ、信頼せよ」ということです。

そして語られるのがインマヌエル預言です(14)。主はメシアを約束してくださいませ。主イエスが誕生されたときに、この預言が成就しました(マタイ1:23)。

この預言が直接的に何を預言していたのか、いろんな解釈があります。その一つにアハズにヒゼキヤが与えられる預言であると言われています。ヒゼキヤはアハズの次の王となり、主に従う素晴らしい王とされています。「おとめ」と訳されている言葉

も「若い女性」と訳されている言葉であり、「男の子を産む」も完了形であることからこのように読み取ることができます。

しかしイザヤは、この後アッシリアによりアラムも北イスラエルも滅びることを語ります(16-17 BC720年に実現)。

そして18節以降、「その日」を4度繰り返します。「その日」とは、終末的にはキリストの再臨と最後の審判の時ですが、ここでは、北イスラエルがアッシリアに滅ぼされることを語っています。この裁きはアッシリアによって行われますが、主の御業であり、イスラエルに対する懲らしめです。

インマヌエル預言は、イザヤの息子「シエル・ヤシュブ (残りの者は帰ってくる)」と共に語られました。災いが過ぎ去り、残りの者に幸いが訪れ、バビロン捕囚からの解放を語っていると理解することができます。そしてその先に御子の御降誕を指し示していると、新約に生きる私たちは理解することができます。

ここでの問題はアハズ王の不信仰です。主の御言葉に聞くことなく、自らの判断で生きようとするとき、主は、主ご自身の御力を示され、裁きを下されます。しかし同時に、「二人の王の領土は必ず捨てられ」(16)、アハズが恐れていたアラムとエフライムは共に滅ぼされます。人間の目に絶対的な力であり誰もが服従するしかない権力者でも、主の御力の前に逆らうことはできず、主に勝利することはできません。

そして主は、メシアをお与えくださいませ。そしてこのお方こそ、「インマヌエル」(神は我々と共におられる)です。

今、世界では、ウクライナやパレスチナにおいて戦闘が続いています。独裁者が世界を支配しているように見えます。そのため、国は軍事力を増強しようとしています。

しかし、全世界を創造され、私たちに罪の赦しと永遠の生命を与える力を持っておられるお方が、私たちの主なる神です。私たちは主を全面的に信頼し、主に助けを求めなければなりません。主の御力が、為政者たちに対しても働いてくださいます。

周囲を見渡して、力に屈するのではなく、御言葉によって語りかけてくださる主を信じ、問題の解決を主に委ねて祈り続けることが求められています。

主なる神はイザヤに、大きな羊皮紙を取り、その上に分かりやすい書き方で預言を記すように命じます(1)。このときイザヤは信頼しうる証人を立てることからしても、これは重要な命令でした(2)。

その命令は「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ(分捕りは早く、略奪は速やかに来る)」です。イスラエルに対する罪の裁きが即座に来るために悔い改めよとのメッセージです。

そしてイザヤは、女預言者に近づき、彼女は身ごもります。このとき主はイザヤに「この子にマヘル・シャルル・ハシュ・バズという名を付けなさい」と命じます(3)。まさに1・2年の内に北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされるとの宣告です。

主による裁きの理由は、「この民はゆるやかに流れるシロアの水を拒んだ」からです(6)。シロアとはエルサレムに流れる用水路です。主が生ける水である福音をイスラエルの民に語りかけたのに、彼らはそれを拒んだからです。「レツィンとレマルヤの子のゆえに」(6)とは、アラムの王とイスラエルの王のことです(7:1)。

その結果イスラエルは、アッシリアという激流に流されていきます(7)。そして、この主の裁きは、アラムや北イスラエルだけではなく、南ユダにも及びます(8)。

主なる神は、主の御声に聞くことなく、力に対抗して、国々が同盟・連合をしたとしても、おののけと語ります(9-10)。

そして、人間的な決定を行ったとしても、実現することはなく、勝利を得ることはないことを、主は断言されます。

つまり7章において、主はイザヤに対して、息子シャル・ヤシュブ(「残りの者は帰ってくる」の意味)と共にユダの王アハズに語ったように、主は我らと共におられる(インマヌエル)からこそ主の御声に聞き従うようにと、南ユダの人々に語るように、主は命じられます(11-15)。

命令は2つです。第一に、人間的な策略により同盟を結んではならないこと(12)。つまり、力を恐れ、自分たちも力で対抗することをしてはならないことです。第二に、「万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。

あなたたちが畏るべき方は主。

御前におののくべき方は主」。

つまり主なる神は、人間の持つ力を恐れ

るのではなく、主なる神の存在、主の御力を畏れ敬うことです(13)。

イスラエルの民は、聖所(神殿)があり、神殿で礼拝を献げているから大丈夫だとの思いがあります。しかし彼らにとってそれが「つまずきの石」・「妨げの岩」です(14)。神殿で礼拝するという形が大切なのではなく、主なる神をどのような方として礼拝を献げているのか理解することが大切です。そして主が語られる御言葉に聞き従うことが求められます。ですから、聖所がある・神殿があるからと言って、安心してのことこそが、つまずきの石であると語ります。そして、ユダもまた滅ぼされ、バビロンに捕囚の民として連れて行かれます(15)。

主なる神はイスラエルに、「証しの書を守り、教えを封じておこう」(16)・「主がわたしにゆだねられた子らは、シオンの山に住まわれる万軍の主が与えられたイスラエルのしるしと奇跡である」と語ります(18)。しかし彼らは「教えと証しの書についてはなおのこと、「このような言葉にまじないの力はない」と言うであろう」(21)と語ります。これこそが彼らが裁かれる理由です。

滅び行く人々には封じられた教えと証しは、人間的な力に臆することなく、主なる神の御力を信じ、主の御言葉に聞き従う者に与えられる祝福です(8:23b-9:6)。闇の中に与えられる大いなる光であり(9:1)。深い喜びと大きな楽しみが与えられます(2)。これこそがダビデの子として与えられる約束のメシア、イエス・キリストです(5)。この主の預言は、目の前の現実・人間的な力に頼っていれば、信じることはできません。

イスラエルの民に「マヘル・シャルル・ハシュ・バズ」(分捕りは早く、略奪は速やかに来る)と分かりやすく書き記されたものが提示されたように、新約に生きる私たちには、「信じる者は救われる」(使徒16:31)と語られ、恵みの契約が与えられています。

実際に戦争が行われ、武器も持たずにいることは、非常に恐ろしいことです。しかし、主なる神は生きて働いておられ、主を信じる者に、罪の赦しと永遠の生命をお与えくださいます。主イエスは、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、……」と語ります(マタイ10:28)。



イザヤは、主の御言葉に聴こうとしない者に対する主の裁きが行われることを語ってきています。

エフライム（北イスラエル）、サマリア（北イスラエルの首都）の民は、主の御言葉があることを確認しますが、ないがしろにして、心は驕っています(8)。つまり主の御声に聞き従うことなく、自分たちの力で、物事を解決しています。

主の裁きに耐えられるように、自分たちで家を、そして街を作れば良い、と考えています(9)。主の御声に聞き従わない民に対して、主なる神が、レツイン（アラム王、参照：7:1）を興し、イスラエルの民を裁かれます(10)。民は主に立ち帰ることはなく(12)、一日の内に断たれます(13)。

長老、尊敬される者、さらには主に仕え、主の御言葉を教える者、預言者が、こぞって主に逆らい、人々を惑わす者となります(14-15)。旧約のイスラエルの民同様、新約の教会においても、教会内、特に牧師や長老等の教会役員において腐敗が起こると、教会全体、さらには民全体が腐敗します。宗教改革前夜や第二次世界大戦中の日本の教会が、これに似たものでした。現在、こうした状況になっていないか、私たちは自らの信仰を顧みなければなりません。

そうなれば、本来主による施しを受け、救いに入れられる「みなしごややもめすら憐れまれることがなくなります」(16)。そして主の徹底的な裁きが行われていきます(17-20)。それは、同盟を組んでいたマナセとエフライムの間において戦いが起こり、それがユダにまで及ぶびます。

それらは、人間的な敵対関係において戦いが起こりますが、すべては主の裁きの結果です。主の摂理の御業は、私たちには計り知ることができません（参照：ウェストミンスター信仰告白5:2）。

10章に入ると、不正は裁判官に及んでいくことが語られます。偽証は、第九戒違反です。不正な裁判が行われることにより、本来救われるべき弱い者の訴えは退けられ、貧しい者の権利が奪われ、やもめ・みなしごが餌食・略奪に遭います(10:2)。

裁判官の下す判決は、その場限りのように思い、自らに優位に働くように、判決を下しているようであっても、その一つひと

つの判決は、「刑罰の日」(3)、つまり最終的には最後の審判に直結していることを、忘れてはなりません。

不正を働くことによって、その場において自らの富を得ようとも、最後の審判においてこの罪が明らかにされ、裁きが下されます。言い逃れすることはできません。

北イスラエルは、主が遣わすアッシリアによって滅ぼされます。しかし主なる神は、そのアッシリアもまた、主の裁きもたらされることを宣告します(5-7)。主はアッシリアに略奪を求めたのに、アッシリアは北イスラエルを滅ぼし尽くすこと、断ち尽くすことを行ったからです。そして、アッシリアは、イスラエルを偶像の国にしようとします(8-11)。これは明らかに主が求めておられることに反することです。

そのため、イスラエルに対する主の裁き・懲らしめが終わった後、主はアッシリアを罰することを宣告します(12)。主の裁きの生々しい状況が、16-18節で語られます。

「その日」(20)とは、アッシリアによって北イスラエルが滅ぼされた日です。南ユダは、アッシリアに攻撃されつつも、最終的には滅ぼされることなく、残りの者が残されます。「その日」主は、アッシリアに頼ることなく、主なる神、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る者に、救いをお与えくださいます(24-27)。

前回も語ったように、目の前にある人間の力による武力を恐れるのではなく、生きて働く主なる神を信じ、畏れることが求められます。そうすれば、地上において、様々な艱難があり、武力による戦争が行われたとしても、主は「あなたの重荷を取り去ってくださり、軛は砕かれます」(27)。

神の民イスラエルであっても、キリスト教会に属するキリスト者であっても、主への信仰から離れ、主の御言葉に聞かなければ、主の裁きもたらされます。私たちに今改めて語られていることは、主がお語りになる御言葉に聞くことです。主の御前にひれ伏すことです。

そのために私たちは、自分の解釈で聖書を理解するのではなく、信仰の戦いをもって形成してきたウェストミンスター信条に従い聖書を解釈し、教会形成を行うことが求められています。

南北に分かれたイスラエルに対して、主は預言者イザヤを立て、罪を悔い改めよ、さもなくば滅ぼすとの預言が語られています。9～10章では、民衆が主の御言葉に聴かないばかりか、長老や尊敬される者・偽預言者、さらに裁判官も罪に満ちていると主は警告します。イスラエルの民は、口では神を信じると語り、形において神に礼拝を献げていますが、実態は偶像を崇拜しており、主の裁きを逃れることができません。

そうしてメシアである神の御子イエス・キリストが約束されました(9:5)。この約束のメシアがどのような状況において誕生するのか、今日の御言葉で語られています。

「エッサイの株」(11:1)と語ります。エッサイはダビデの父です(サム上16:1、マタイ1:6)。エッサイという名には、「軽蔑・貧しさ」があります。

つまり、軽蔑されていたエッサイの家は、木が切り倒された状態になり、もう後はない状態に思われていました。まさにイザヤが預言している当時、北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされ、南ユダも同じように主の裁きもたらされてきました。

イスラエルは主の裁きとして、アッシリアに戦争により滅ぼされます。これが「切株」と語られる理由です。

北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされるとき、南ユダにはわずかな者が残され、国が滅びることはなく守られました。しかしこの後、南ユダもバビロンにより滅ぼされます。国としては完全に滅ぼされ、壊滅状態です。しかし、一部の民は捕囚の民とされ、生き延び、そして信仰を守ります。そして70年後に、エルサレムに帰還することが許され、エルサレム神殿を再建します。これこそが、「ひとつの芽が萌えいで」ることです。そして、捕囚の民とされた者の中から、ダビデの子として神の御子イエス・キリストが与えられます。

キリストは、常に「主の霊がとどまっています」(2)。そのために、周囲の状況、つまり偶像礼拝・腐敗・力による支配に左右されることはありません。そして主なる神は、イスラエルの民に、目の前にある現実・恐れに左右されることなく、生きて働く主なる神を畏れ、主の御言葉に聞き従うように語ってきました。正義をもって人々を

裁き、不正な裁判官にもなりません(3)。

このように神の義が貫かれることにより力の支配により虐げを受け、何もできず、死の恐怖に脅える者に、裁判で勝利が告げられ、主の助けが与えられます。そして、力による支配、不正、腐敗、生活の乱れは、取り除かれていきます。

2700年前に預言された言葉は、2000年前にイエス・キリストがお生まれになることにより成就します。そしてイエスは、インマヌエル。「神は我々と共におられる」と語られました(マタイ1:23、イザヤ7:14)。

キリストは十字架の死と復活を遂げ、天に昇って行かれました。天にあるキリストは、今なお私たちと共にいてくださいます。主イエスにより、不正が取り除けられ、虐げられている人たちに希望が与えられます。

今なお、力ある者たちが世を支配し、不正がはびこり、弱い人たち・貧しい人たちが虐げを受けています。しかし、インマヌエルであるキリストを信じるとき、主の霊に満たされ、神の国において、弱い者・貧しい者たちが受け入れられる祝福に希望を見いだすことができます。同時に正義であるキリストが、罪人である私の罪を赦してくださいったように、隣人の罪を赦し、互いに和解することが求められています。

私たちは、身近な人々と交わり・意思疎通を行い、和解と平和を実践しなければ、地域社会・国家間へと広がりを見せることなどあり得ません。

そして、キリストにおいて真に平和が実現するとき、世界の間で行われている争い・戦争はなくなります(6-9)。

今、世界の各地で独裁者による支配と共に自由が奪われ虐げ・迫害を受けている民がいます。そして問題は解決しないのだろう、と諦めの気持ちが湧いてきます。

しかし、力と権威を持っておられる主なる神が私たちと共におられます。その御力は為政者にも及びます。主の御力が為政者に示され、虐殺・虐げを終わらせ、悔い改めと和解・平和を実現するように、主の御業に委ねることが求められています。

私たちキリスト者は、キリストの再臨と神の国の完成の時を目指し、エッサイの根であるキリストを旗印とし、主による栄光に満たされる希望を持って歩み続けます。

11章の前半にはメシア預言が語られていますが、特に「エッサイの株」・「エッサイの根」に注目しました(1,10)。すべて滅ぼし尽くされた所に、メシアであるイエス・キリストを約束されています。

イスラエルの罪の故に主の裁きとして、北イスラエルはアッシリアに、南ユダはバビロンに滅ぼされます。これが神の民とされたイスラエルの現実ですが、私たちの現実でもあることを忘れてはなりません。

私たちは、生まれながらにして、信仰を告白し、罪赦された現在においても、私たちは罪人であり、罪による死を避けて通ることができません。「全的墮落」です。

また聖書では、罪の結果として、主による懲らしめとして滅ぼされることと、散らされることが語られます。最初は、人々がバベルの塔を作ったときです(創世記11:7-8)。

イザヤの時代、北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされ、南ユダがバビロンによって滅ぼされていきます。ごく一部の人は、捕囚の民としてバビロンに連れて行かれますが、ある者はカナンの地に残されます。そしてある者たちは、周辺諸国へと逃れていきます。彼らが離散したユダヤ人(ディアスポラ)と呼ばれるようになります。

さらに新約の時代においては、主イエスの十字架の御業が成し遂げられ、主イエスは天に昇って行かれますが、弟子たちは宣教を開始します。しかし同時に、激しい迫害に遭い、宣教の中心をアンティオケアに移さなければならなくなります。そしてさらにAD70年のエルサレム戦争によりローマにより敗北したことで、イスラエルの人々は、世界中に散らされることとなりました。

第二次大戦後にイスラエルという国が作られ、帰還が始まりましたが、今なお、世界中に、ディアスポラがいる現状です。

「その日が来れば、主は再び御手を下して御自分の民の残りの者を買戻される」(11)と語られているのは、まさにアッシリアによって北イスラエルが滅ぼされたとき、さらに南ユダがバビロンによって滅ぼされたときに散らされていったイスラエルの残りの者が帰還することを指し示しています。

ですから、「その日」は、直接的にはバビロン捕囚からの解放のとき、エルサレム神殿が再建され、散らされた民が帰還する

ことです。しかし現実には、バビロン捕囚からペルシャにより解放されたとき、帰還したイスラエルの民は、一部でした。そしてサマリア化した人々は、原住民と混ざり、異邦人となりました。

ですから12節~15節で語られているようにイスラエルの民が、周辺諸国に勝利を遂げて、エルサレムに凱旋するのは、イエス・キリストの十字架における勝利、さらには終末を待たなければなりません。

主イエス・キリストの十字架の御業・死と復活・昇天の後、ペンテコステにおいてディアスポラの人々がエルサレムに集められ、目が開かれました(使徒2:1-13)。これはバベルの塔における混乱が、終末において回復することを指し示すものであり、それが最後の審判において完成します。

そして、キリストの再臨と共に成し遂げられる最後の審判において、神の民は、エルサレムに凱旋します。

現在のイスラエルという国において行われていること、そしてアメリカを初めとする国々がそれを支持しているのは、この預言が、終末において完成し、神の国が到来すると信じているからです。彼らのことをシオニズムと語ります。誤った聖書解釈であり、福音とは似て非なるものです。私たちは、彼らに与(くみ)することはありません。主が救いに導いてくださるのは、人間的な力でイスラエルに勝利をもたらすことではなく、主の御力により道が開け、凱旋することだからです(参照：11月26日週報コラム「イスラエルとパレスチナ」)。

このことは、ローマ11:25~32の解釈にかかっていると言って良いかと思えます。肉のイスラエルの中にも悔い改めて主を信じる者が出てくるかと思えますが、私たちは求められているのは力ではなく信仰です。

主は、エジプトにいたイスラエルの民を救い出してくださいました。40年の荒野の歩みの中、不平を語り、偶像を拝んだ者もいました。しかし、モーセをとおして語られる主の御言葉を受け入れ、信じた者に、約束の地における祝福をお与えくださいました。主が、広い道を備えてくださり、そこを歩いて都エルサレムである神の国に帰還することができるのは、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従う者です(16)。

イザヤは主から召され(6章)、イスラエル・ユダの罪を指摘し、罪の裁きとして国が滅ぼされていくことを預言してきました。

そうした中、主なる神は、罪を悔い改め、主へ信仰を告白する者に、罪を赦し、神の国の生命を約束してください。それは、「エッセイの株から一つの芽が萌え出で、その根から若枝が育つ」(11:1)と語るように、何もなかったところから、主はメシア、キリストを立て、救いをお与えくださるとの約束です。救いは徹底的に神からの恵みであり、人間の功績はまったくありません。

そして「その日」、直接的には主はバビロン捕囚からイスラエルの人々を解放してください。そして最終的には、メシアであるイエス・キリストの再臨により、サタンが滅び、神の国が完成してください。そして神の民である霊的なイスラエル、つまりキリスト者は、神の御国である天国へと凱旋することとなります。

今日の御言葉は、このように6章から語られてきたことの最後にあたります。主によって一方的に罪の赦しと救いが与えられたキリスト者は、ただただ感謝と救いの喜びをもって主への讚美を行います。

そして12章は、1～2節と3～6節に分かれています。つまり1～2節は「あなた」・「わたし」であり、3～6節では「あなたがた」となっています。神と私の一対一の関係が、信仰共同体へと広がりを見せます。

預言者をとおして、主なる神の御前に立ち、罪を悔い改め、信仰を告白することが求められました。最初に、「わたしが」、つまり、預言者から預言を聞いた一人ひとり、私たち一人ひとりが、主の御前に立ち、信仰を告白することが求められます(1-2)。

主はイスラエルに対して、罪の悔い改めと信仰の告白を迫りました。このとき一人ひとりが自らを省みることが求められます。罪の悔い改めない信仰は形骸化します。

つまり最初に縦の関係、主なる神とイスラエルの民、主なる神とキリスト者たる私たちの一人が、一対一で相対して、罪の赦しと救いを確認しなければなりません。

そして主なる神と出会った者は、救いが示され、主への感謝と喜びをもって、主を礼拝し讚美するものとされます。

しかし、主への感謝と喜びをもって主を礼拝するとき、私たちは一人ではありません。主は「あなたたち」と語り、主がお集めくださった神の民が一つとなり、主を礼拝することを求めておられます。救いの喜びに与るのは、信仰共同体としての教会です。つまり主との間で信仰が与えられ、縦の関係が形成された者は、信仰共同体としての兄弟姉妹との交わりに入れられ、共に主を礼拝する者とされます。ここに横のつながりが形成されることとなります。

ですから、「自分一人で聖書を読み、神を信じた、聖書に従って生きていく」と語る人がいたとしても、それは主が求めておられる信仰の姿ではありません。なぜならば私たちは、主の御前に罪人だからです。そのため、主により信仰を持ったとしても、地上の歩みを一人で信仰生活を行っている、次第に自分よがりの信仰となり、自己中心・いい加減な信仰となるからです。

一方、信仰共同体を形成することにより、主が聖書を通してお語りになる義・聖・真実の規準を確認することができ、それを私たちは、信仰告白・教理問答(カテキズム)として告白します。信仰の一致をもって教会を形成することとなります。

私たちは、信仰告白・教理問答を告白することにより、より純粋な教会を形成し、信仰が独りよがりになってきている信仰者の信仰を修正するのです。

私たちが、自らの罪を悔い改め、主を信じ、主の御言葉に聞き従おうとするとき、同時に、未だに主の御言葉に聴こうとしない人たちとの違いが露わになります。そのため、主の威厳・主の御力を世界に証しすることが求められ(5)、同時に信仰の戦いを強いられます(参照：エフェソ6:10～18)。

別の言い方をすれば、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従うと語りつつ、周囲の人々と同じ生活をすることはできません。

しかし私たちは一人では弱く、周囲の人たちに流されます。そのため、信仰共同体である教会に属し、主を証しする者同士が、共に歩むことが大切となります。

戦争・地震・社会の閉塞感と、息が詰まる世の中ですが、私たちキリスト者は、希望を持って生き、神の御国を証しして行くことが求められています。

1～12章では、ユダとイスラエルに対する主の裁きと、最後に回復を預言しました。それに続き13～23章では、諸外国に対する預言・そして審判が語られます。

バビロン、アッシリア、エジプトという強大な国々と共に、ペリシテ、モアブ等の周辺の小国についても語られていきます。当時、知られていた国々がすべて語られていると言つて良いかと思ひます。つまり旧約聖書は、ユダ・イスラエルが中心に語られていますが、主なる神の支配は、全世界に及んでいます。

そして主なる神は、神の民としたイスラエルとユダの人々に罪の悔い改めと主への信仰を求めようとして迫りますが、それはイスラエルとユダに限ったことではなく、全世界の人々に向けて語られています。

主は天地万物を創造されましたが、バベルの塔の建設をもって、人々は分けられ、散らされていきました(創世記11:1-9)。この後、主はアブラハムを選び、イスラエルを神の民としてくださいました。しかし、主がイスラエルを選ばれたのは、イスラエルが優れているからではありません。すべての者が全的に墮落した罪人であり、罪の刑罰としての滅びを逃れることができません。約束されたメシアが備えられるために、主はイスラエルを選ばれたのであり、イザヤの時代にあつても、イスラエルを守られているのは、メシア預言のためです。

ですから13章から、諸国に対して、罪を指摘し、主の裁きが語られていきますが、それは同時に、彼らに対しても、罪の悔い改めと主への信仰が告白されるならば、彼らもまた主による救いが約束されていることを忘れてはなりません。

最初に取り上げるのがバビロンです。バベルの塔の街バビロンを最初に挙げるのは、私は創世記との関わりがあるかと思ひます。

「わたしの怒り」(3)つまり、主なる神は、バビロンを招き入れて、主に逆らい続けるイスラエルに対する裁きを行わせることを預言します。つまり、バビロンが南ユダ王国を滅ぼしますが、罪の裁きとして、主なる神の命令によって行われます。

全世界の主権は主なる神にあります(4,5)。そのため一時的に強国を作り、世界を支配したとしても、主に逆らう支配は、主によ

る裁きを逃れることができません。

そして「主の日」(6,9)に、主による裁きが行われます。

主によって用いられ、神の民南ユダ王国を滅ぼすように立てられたバビロンですが、バビロン自身が行ってきた罪の故に、主の裁きもたらされます(6～11)。

「オフェル」(12)は、良質な金を輸出していた町であり、値踏みもできないほどの高価な宝物のことであり、それを得る以上に、人がまれなもの、つまりすべての民が主による裁きに遭うことを語ります。

「見よ、彼らに対して

わたしはメディア人を奮い立たせる」(17)。

バビロンによって捕囚の民とされたイスラエルの民は、ペルシャによって解放されますが、聖書においては、メディア人によりバビロンが滅ぼされることを語っています(イザヤ13:17、21:2、エレミヤ25:25、51:11,28)。

カルデア人とは、バビロンを作った国の人々です(19)。ですからカルデア人にとってバビロンは誇りでしたが、滅びの象徴であるソドムとゴモラのように、主による裁きにより、徹底的に滅ぼされ壊滅状態に落ちることを語ります(19)。そしてバビロンは廢墟の町と化します(20-22)。

そして最後、

「今や、都に終わりの時が迫る。

その日が遅れることは決してない」(22b)。

バベルの塔を生み出したバビロンは、主による裁きを逃れることができません。その日は必ず到来します。今、榮華を極めていく国々も、主なる神を信じることなく、力により人々を支配している者たちは、主による裁きを逃れることができません。

バビロンの滅びとイスラエルの回復に関しては、改めて14章において学ぶこととなりますが、大バビロンが倒れるとき(黙示録14:8、18:2)、バベルの塔における罪の刑罰が解消され、神の国における平和が到来します。そのためこの13章において、諸国の最初にバビロンが語られているのは、バビロンという国に限定することなく、罪の支配、サタンの支配をも包括していることであり、救済史の全体、聖書の全体の理解をする上で、理解することができるのではないかと思ひます。

13章では、主なる神はイスラエルの民に対する裁きを徹底的に行われることを語りました。しかしこの主の裁きは、全的に墮落し、バベルの塔の建設によって分かれたすべての民に対する裁きでした。

その上で「その日」、キリストが再臨し最後の審判が行われる日は、遅れることなく、霊的なイスラエルであるキリスト者は、神の恵みにより救われます。このことにより、バベルの塔によって分かたれるという呪いは解かれ、天国における主の祝福に満たされます。そしてここで語るバビロンとは、南ユダ王国を滅ぼすバビロンであり、それは同時にサタンを意味する大バビロンのことであると語りました。

「その日」、バビロンに捕囚の民となっていたイスラエルは、解放されイスラエルの家であるエルサレムに帰還します(1)。同時に大バビロンが滅び、神の国が完成し、すべての神の民が天国に凱旋します。

「彼らの土地」と語る都エルサレムですが、大バビロンが滅びたときに訪れる「彼らの土地・約束の土地」は、霊的なエルサレムであり、地上のエルサレムと解釈するシオニズムは、間違っています。

そして、「寄留の民は彼らに加わり、ヤコブの家に結びつ」きます(1)。イスラエルの外にいた異邦人も、信仰により霊的なイスラエルとして、神の救いに与ります。

そして、今まで力において支配していた者たち、すなわちバビロンであり、この後、アッシリア・ペリシテ・モアブと言った人々のことが語られていきます(2)。今まで弱小国であったイスラエルは、これらの国々に、力で支配されていましたが、神の御国が完成し、神の御力が示されるとき、諸国の民こそが捕囚の民としてつながれます。

そして「主は、あなたに負わせられた苦痛と悩みと厳しい労役から、あなたを解放たれます」(3)。「苦痛と悩みと厳しい労役」は、罪の刑罰としての苦痛を伴う労働との繋がりが(創世記3:16～19)、根本的な罪の刑罰からの解放を語っています。

そして、大バビロンの滅亡が語られていきます(4-21)。

神の支配・神の御力は、いつの時代であっても、どの国・どの社会にも及んでおり、

そこで行われる罪・虐げを見逃すことはありません。そしてこの時、「全世界は安らかに憩い 喜びの声を放」ちます(7)。

9節からは「陰府」という言葉が繰り返して語られます(9, 11, 15, 19節)。ヘブライ語(旧約)では「シェオル」、ギリシャ語(新約)では、「ハデス」です。すべての民が、自らの罪の刑罰として肉の死と共に陰府に行くことが避けられないのですが、この陰府に、キリストが私たちの代わりに行ってくださいました(使徒信条)。これは、新約における「地獄(ゲヘナ)」と同意語であると言えます。

私としては、「陰府」と「地獄」が両方、新約において用いられていることが、カトリックにおける煉獄思想に繋がったのではないかと考えています。

「ああ、お前は天から落ちた  
明けの明星、曙の子よ。

お前は地に投げ落とされた  
もろもろの国を倒した者よ」。

「明けの明星」、「曙の子」(12)とは、世界を支配した時の権力者であり、その時代にあっては、光り輝いているのですが、自らの力をおごり高ぶっていたとしても、主の裁きを避けることはできず、陰府に落とされます(13-15)。

そして、「悪を行う者たちの末は 永遠に、その名を呼ばれることはない」と語られます(20)。「命の書に名が記されていない者」、つまり主なる神を信じない者は、すべて陰府に下り、誰一人主の裁きを逃れることができません(参照：黙示録20:11～15)。

「その名が命の書に記されていない者は、火の池に投げ込まれた」(黙示録20:15)。

そして22, 23節においてイザヤは、「万軍の主は言われる」と語ります。13:4, 13においても語られており、イザヤ書においてこれからも繰り返し語られています。すべてを支配し、御力を持っておられる主なる神が、罪に生きる者たち、そしてバビロンとしてのサタンを徹底的に裁き、断ち滅ぼされることを宣言しています。

だからこそ私たちは、万軍の主なる神の下に信仰を持ち、委ねて生きるとき、地上にあっては力のない弱い存在ですが、救いの希望に満ちて、神の御国へと凱旋することができるのです。

主なる神は万軍の主であり、罪に対する裁きが徹底的に行われ、滅びは陰府に落ちることです。13章以降、各国の裁きを語りますが、最初の13:1-14:23ではバビロンについて語られてきました。バビロンは南ユダ王国を滅ぼす大国ですが、北イスラエル王国を滅ぼすアッシリアよりも先にバビロンが語られたのは、バベル、つまりサタンの代表として語られているのであり、そのことが黙示録において「大バビロンが倒れた」(黙示録14:8)に繋がります。

そして、今日の所から各国について語られていきます。今日は、アッシリアとペリシテの2カ国を取り上げることとします。

主がイザヤに対して預言を語るように命じられた時期、強国アッシリアの力がイスラエルに襲いかかっています。主ご自身が、イスラエルの民を懲らしめるために、アッシリアの力を用いられます。しかし、主なる神の御支配の下にあって、罪を犯すすべての国が主による裁きに遭うのであり、アッシリアも例外ではありません。

イスラエルを支配しておられる万軍の主なる神は、全世界を支配しておられます。そして「万軍の主は誓って言われた」(24)。信仰の証しとして、神の民・キリスト者が主に誓いを立てることはあるかと思いますが、ここでは主がイスラエルに誓われます。主なる神が、イスラエルに誓われるのは、アッシリアが滅びるといふイスラエルの民にとって信じがたいことが、主によって成し遂げられることの確かさを示すためです。

アッシリアは、主による裁きとして、滅ぼされます(25)。このことに先立ち、北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされます。しかしアッシリアが滅ぼされ、さらにバビロンが滅ぼされることにより、イスラエルは捕囚から解放され、エルサレムへの帰還が許されます(25cd)。

25 「その軛は、わが民から取り去られ  
その重荷は、肩からはずされる」。

主なる神が万軍の主であり、主が語られたことが必ず実現するだけでなく、主なる神は、御計画されたことを約束され、そして実現していただきます(24, 26-27、参照：ウエストミンスター信仰告白3:1)。主の御計画が実現するからこそ、私たちは主なる神を信じ、主がお約束してくださる救いに希望に生き

ることができるのです。

主なる神は、世の中の成り行きに任せて、ご自身の業を行うものではありません。主なる神を信じ、霊的なイスラエルとするキリスト者を救うことをお約束してくださり、キリストの再臨により、最後の審判と神の民の救いを実現し、神の御国へとお招きくださいます。

続けてペリシテに関して語ります(28-32)。

「アハズ王の死んだ年のことである」(28)と語られています。BC715年のことです。北イスラエルが、アッシリアに滅ぼされたのが720年であり、その後のことです。この当時、北イスラエルが滅ぼされる中、南ユダも同じように滅ぼされるのではないかと思われている最中のことです。

ペリシテは当時の海運国として地中海文明と接触し繁栄していたエクロン、アシュドド、アシュケロン、ガザ、ガトなどの主要都市から成る国でした(巻末地図4、5)。今のパレスチナのガザ地区にあたります。

ペリシテの人たちは、南ユダの王アハズが死んだことを喜びます。なぜならば、アハズ王はアッシリアの勢力に屈し従属しており、ペリシテはアハズ王の背後にいるアッシリアの力に脅えていたからです。ペリシテは、アハズ王の死去によりアッシリアの脅威からも解放されたと思ったのです。

南ユダ王国はヒゼキヤ王となり、主の守りの内にユダはアッシリアと平安を保ちますが、その一方でペリシテは、アッシリアの攻勢を受けることとなります(29)。そして、根絶やしにされます(30-31)。主なる神を信じることなく、人間的な力関係に生きる時、主の裁きを避けることはできず、ここに希望はありません。

一方、南ユダは……。

主を信じる事がなかったアハズ(列王下16:1-4)の後に王となったヒゼキヤは、主の目にかなう正しいことをことごとく行っただけ(列王下18:1-4)、主は、ユダの民を救い、お守りくださいました。

ここではアッシリア、そしてペリシテがでてきますが、そこに、神の民イスラエル・ユダが常に中心にあります。主の愛に満たされ、イスラエルが主なる神を信じ、主に委ねて歩むとき、イスラエルは主の恵みと守りが与えられます。

預言は、主がこれから起こることを予め神の民に対して語られ、神の民は主の約束の実現に備えることですが、預言にはいくつかの種類があるかと思えます。

第一に、預言者が語った時代、あるいは次の世代に実現することです。例えば、北イスラエルの滅び、南ユダの滅びとバビロン捕囚、さらに捕囚からの解放です。

第二に、救済史全体を網羅し、メシアであるキリストが来臨と救いの完成、最後の審判と神の国の完成です。これらは、預言を聞いたイスラエルの民は具体的なことを理解することができず、奥義に包まれています。

第三に、直近の出来事だけれども、特定の出来事ではなく、主が語ろうとしておられる真意を理解することに着眼することです。イザヤ書15・16章はこれにあたり、具体的にモアブに起こったどのような出来事か、史実を特定することはできません。新約に生きる私たちは、主の警告に対してモアブのとった言動に対して、主がどのように答えておられるのかを、確認することが求められています。

15章では、モアブが滅びていく状況が語られます。アル、キル(1)、ディボン、ネボ(2)、ヘシュボン、エルアレ(4)、ツォアル、エグラト・シェリシヤ、ルヒト、ホロナイム(5)、ニムリム(6)といった地名が記されています。巻末の聖書地図にも記されていない都市がほとんどです。モアブの全域が攻められ、滅びに向かっていく状況が描かれていると言って良いかと思えます。

私たちが15章で着目すべきことは、モアブの嘆きです(2-4)。主による裁きに対して、苦しむ者・モアブの人々は、嘆き・叫び、助けを求めます。

このモアブの叫びは、シオン(16:1)、つまりユダの人々に届きます(2-4)。そしてこの叫びは、主にまで届きます。

主なる神は、この叫びを無視されるお方ではありません(4b-5)。主はダビデの幕屋に王座が据えられることを語り、ダビデの系図南ユダ王国の王が統治し、その支配に服するとき、モアブの人々に対する救い・平和が実現することを宣言してください。その結果、モアブを虐げる者を散らし、滅ぼします。

主なる神は、主の統治に従う者、つまり主が支配しておられるユダにモアブが従うとき、主はモアブの救いを約束してください。こうして主は、モアブの叫び・嘆きの声を聞き、応えてくださいました。

私たちは、モアブの嘆きに対する主の答えから、主の御力の支配に従う者を主を信じる信仰と認めてくださっていることを確認することができるのではないのでしょうか。

つまり直接的に主なる神を認め、主なる神を信じるのがなかったとしても、主の御力を認め、それに聞き従うことは、信仰を告白しているのと同じであると、主はお語りくださっているのだと思えます。

しかし、続けて主の回答に対するモアブの態度が記されます。主なる神の支配の下にあるユダの民に対して、モアブは高ぶり、誇り、傲慢で驕っています(6)。

つまり、モアブの叫びをお聞きくださった主なる神により、一時的に平和を取り戻したモアブでしたが、モアブは主の御力に従うこと、つまりユダ王国にひれ伏すことができませんでした。あくまで自分たちの力を誇ろうとします。そのため、主の裁きがモアブにもたらされます。どれだけ泣き叫び助けを求めても、主は彼らの声を聞き、助けてくださることはありません(7)。

このとき主なる神は、「シバマのぶどうのために泣く」、「わたしは涙でお前を浸す」(9)と語られます。主なる神は、モアブが異邦人だから、彼らを滅ぼすのではありません。できるならば彼らが罪を悔い改め、主を受け入れてほしい、救われてほしいと願っておられます。それが叶わないことに対する主の涙です。

ルツ記の舞台はモアブであり、主はモアブの女ルツを憐れみ、イスラエルのボアズとの結婚が許され、そしてボアズとルツからダビデ王、そしてイエス・キリストが誕生します(ルツ4:18-22、マタイ1:5)。

主なる神は、イスラエル・異邦人の区別なく、主の御言葉にひれ伏し、罪を悔い改める者、主に従う者に救いをお与えくださいます。しかし主の警告の言葉に対しても、傲慢になり、聞き従わない者には、彼ら自身の罪の故に裁きを行われます。

私たちキリスト者も、主の御言葉に聴き、主への信仰に生きることが求められています。



預言者イザヤは、イスラエルとユダの周辺諸国の滅びについて語ってきていますが、17章ではダマスコ、そしてエフライムが取り上げられます。

ダマスコとは、アラムの首都です。またエフライムとは北イスラエルのことです。そしてダマスコとエフライムは、アッシリアの力に対して軍事同盟を結んでいました。軍事同盟を結ぶことにより、強国であるアッシリアに対抗することができ、国を維持し続けることができると考えていました。

しかし、ダマスコは異邦人・偶像の国であり、エフライムは、本来神がお選びになった神の民でした。イスラエルが主なる神への信仰を強くしていれば、火と油の関係であり、一緒になり軍事同盟を結ぶことなど考えられない関係です。

そうした両国の関係を、主なる神はどのように思っておられるのかを、今日の御言葉から確認することが求められています。

1～3節では、エフライムもダマスコも、滅ぼされる状況が語られています。

続く：『アラムに残るものは イスラエルの人々の栄光のようになる』と万軍の主は言われる。ここは、解釈が分かれるところです。イザヤ書では「残りの者」が繰り返し語られていますが、神の民イスラエルにおいて、信仰を失うことなく、信仰を貫く人々に対する救いが語られるときに用いられます。

一つの解釈は、イスラエルの残りの人と同様、アラム(ダマスコ)に残りの者が与えられ、主による救いが与えられるとします。

もう一つの解釈は、「イスラエルの人々の栄光のようになる」という言葉が、実現することのないことであり、このようなことが起こるはずがないと、否定的に解釈することです。

私としては後者だと思えます。なぜならば、ここではイスラエルよりもエフライムが用いられているからです。新約聖書ではサマリア人が出てきますが、つまり彼らは、神の民イスラエルから離れ、異邦人と化していきます。

また、ここでは「アラムに残るもの」と語られ、「アラムの残りの者」とは語られていません。イザヤ書で「残りの民」と語るとき、その主体は救い主イエス・キリス

トが与えられる南ユダ王国の中から与えられるのであり、北イスラエルの人たちに対して「残りの者」とは語られないからです。

そして「その日には」と繰り返し語られます(4, 7, 9)。終末における主の裁きのときです。最後の審判では、主に逆らう者たちが徹底的に滅ぼされていきます(4-6, 9)。

しかし、主に従う者に対する救われます(7-8)。「その日には、人は造り主を仰ぎ、その目をイスラエルの聖なる方に注ぐ。もはや、自分の手が作り、自分の指が作った祭壇を仰ぐことなく、アシェラの柱や香炉台を見ようとはしない」。エフライムであるイスラエルの民が、主への信仰を取り戻し、ダマスコの人たちも従うのであれば、彼らは神の救いに導かれたことでしょう。

しかしイスラエルの人々は、神を忘れ去り、砦と頼む岩を心に留めようとしません(10)。主なる神は、僅かにでも救いの道を指し示してくださっているにも関わらず、彼らはそれを拒絶したのです。このとき、主の裁きが、ダマスコにもエフライムにも、徹底的に行われます。

異教の国日本に生きる私たちキリスト者にとってエフライムのことは他人事ではありません。強い者になびき、知らず知らずの内に信仰が弱まり、離れてしまいます。しかし私たちキリスト者はどのような時にも人間的な力に支配されることなく、主に依り頼み、主に従って生きることが求められています。主こそが私たちの砦の岩です。

12節以降、「多くの民・国々」について語られています。すべての民、すべての国々と語っても良いかと思えます。すべての人は罪を帯びて生まれ、日々、主の御前に罪を犯しています。全的墮落と語ります。誰一人、自分の力を誇り、自分の力によって永遠の生命を得ることはできません。

全世界を支配している主なる神を忘れ、今、目に見えている世界の中でのみ生きることは、すべて滅びに向かう道です(12, 14)。

こうした中、主は私たちを神の民、救いへと導いてくださっています。自分の力で、信仰を守り抜くではありません。私たちが主に寄りすがり、主を砦として生きるとき、主は神の御国・栄光に導いてくださいます。私たちの信仰は守られます(参照：ウエストミンスター信仰告白17:1「聖徒の堅忍について」)。

イザヤ書では、諸外国の裁きについて、続けて語られています。

今日取り上げるのは、クシュ（エチオピア）です。新共同訳聖書の表題は「クシュとの陰謀」と記されていますが、本文からかけ離れているのではないかと思います。

「災いだ、遠くクシュの川のかなたで羽の音を立てている国は。

彼らは、パピルスの舟を水に浮かべ

海を渡って使節を遣わす」(1-2a)と語られています。「遠くクシュの川のかなたで」と語られているのは、ナイル川のことで下流のエジプトのことを指すとの解釈もありますが、クシュのことが語られているかと思えます。「羽の音を立てる」とは、「羽こおろぎ」のことを語っています。そして彼らは「パピルス」紙を用いています。

「行け、足の速い使者たちよ。

背高く、肌の滑らかな国

遠くの地でも恐れられている民へ。

強い力で踏みじめる国

幾筋もの川で区切られている国へ」(2b)。

これはエチオピアの人たちのことを語っています。遠く、エチオピアの地から主なる神が使者を遣わします。

つまり18章では裁きは語られておらず、遠くの方から、主なる神による救いが到来することが語っています。

「世界の住民、地上に住むすべての人よ

山に合図の旗が立てられたら、見るがよい角笛が吹き鳴らされたら、聞くがよい」(3)。

全世界の人々が、主なる神が遣わされた使者を見なければなりません。ここは、メシアであるイエス・キリストのことが指し示されているようです。主イエスは生まれたばかりのとき、ヘロデ王の虐殺を避けるために2年間、エジプトに逃れていました。こうしたことと、重ね合わせることができるのではないでしょうか。神の救いは、イスラエル・ユダからではなく、地の果てから到来するのであり、イスラエルの民も、自らを誇ることなく、主の使いを見て、主の御言葉に聞くことが求められます。

主はわたしにこう言われた。

「わたしは黙して

わたしの住む所から、目を注ごう。

太陽よりも激しく輝く熱のように

暑い借り入れ時を脅かす雨雲のように」(4)。

主なる神が、神の民に対する救いをお与えくださる熱い思いが伝わってきます。一方において主なる神は、預言者を通して、強く罪の悔い改めを語り、さもなくば裁きがもたらされることが語ってきています。一方、遠く天にあって、私たち神の民を見守っていてくださいます。今、私たちは目で主なる神を見ることができないため、「神はいない」と語ることは許されません。参照：ヨハネ3:16-17「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」。

「刈り入れ時の前に、花が終わり

花の房が実となり、熟し始めると

主は枝を刃物で切り落とし

つるを折り、取り去られる」(5)。主なる神が、すべての祝福に満たされた実りを収穫されます。

そして、肉食である猛禽も野の獣も、主がお与えくださった実りを食べます(6)。つまりもう他の動物を襲う必要がありません。そして、人も支配・被支配の関係はなくなり、争うこともありません。イザヤはすでに11章で、メシアが与えられることによって到来する神の国について語ってきています(11:6-10)。

7節「そのとき」(7)です。イザヤ書は最後の審判と神の国の完成の時を「その日」と語ってきています。「その日」ほどではありませんが、イザヤ書では「そのとき」と何度となく用いられます。神の国が完成し、すべての民が主を誉め讃えるときです。

このとき、敵も味方もなく、あらゆる国々から、民が訪れ、主を誉め讃え、そして主への貢ぎ物がもたらされます。

主なる神は、完成された都エルサレム、シオンに座しておられます。このときのことを、黙示録は語っているのではないのでしょうか(黙示録7:9-12)。主によって集められた神の民は、主の招きにより、主の晩餐に与り、恵みに満たされます。

主は罪に対する裁きを徹底的に行われませんが、主によって集められ罪赦された神の民は、恵みと祝福に満たしてください。

イザヤは諸国の裁きについて語っています。このとき同時に主なる神が異邦人の国を支配し、主による恵みが示され、主を信じる民に主の祝福が与えられます。

ダマスコ(アラム)とエフライム(北イスラエル)では、「その日」に主を礼拝する者とされます(17章)。主による世界の民への呼びかけが行われることにより(18:3)、クシュ(エチオピア)から主による救いが示されていきます。そのとき神の国が完成し、すべての民が主を誉め讃えるときが与えられます。

そうした背景にあつて、エジプトについての託宣が語られます。偶像を礼拝しているエジプトの民たちは打たれ、主による裁きもたらされます。このとき、偶像がおろめくことにより、「エジプト人の勇気は、全く失われ」ます(1)。偶像という強いシンボルがあるからこそ、勇気が与えられ、強大な力を諸国に誇る事ができたのであり、シンボルを失うことにより、一人の人間としてのエジプト人の弱さが露わにされているように思います。シンボルを失い、力が削がれていくと、犯人捜し・責任転嫁が行われ、同士討ちが始まります(2)。そして、主の裁きとして、エジプトが滅びていく状況が語られていきます(5-15)。

最後の審判として強国エジプトが滅びることにより、神の国が到来します。そしてエジプトにおいて、主を礼拝されます(18)。

このとき「カナンの言葉」(イスラエルにおけるヘブライ語)のみが用いられます。つまりバベルの塔により、世界中の人々が異なった言葉を用い始めたのですが、ペネテコステの日、世界中から集まって来た人たちが、言葉を理解することができるようになり、その日に、バベルの塔の呪いが完全に解かれ、人々が一つの言葉を語り始めます。つまり神の国の到来は、言葉の混乱が収束することをも、意味しています。

そして偶像は廃れ、一人の神・主なる神が世界を支配することとなります(18)。そして皆が一人の人のよう主を礼拝します。

そして主を礼拝するとはどのようなものであるかが語られていきます。①祭壇を築き(19)、礼拝の場所が整えられます。②祈りが献げられます(20)。③主御自身が示され、神の啓示が行われます(21)。これが新約においては御言葉の説教です。④神が礼拝され、

請願が立てられ、備えの供え物を献げられます(21)。私たちの礼拝における感謝の応答としての献金と奉仕です。⑤「撃たれる。しかしまた、いやされる。彼らは主に立ち帰り、主は彼らの願いを聞き、彼らを癒やされる」(22)。これは戒規(訓練)のことです。

「撃たれる」・「戒規する」と語れば、主の裁きのように聞こえますが、戒規は訓練であり、戒規を行うことにより、主の御前に立ち帰り、罪の悔い改めを求め、信仰を新たにすることが求められます。繰り返しますが、戒規が裁きとなつてはなりません。

教会を立てるために、正しい礼拝が必要です。このときに求められるものを「教会のしるし」と語りますが、祈り・御言葉の説教・聖礼典の執行・戒規です(参照:ウエストミンスター大教理問108)。正しい礼拝が献げられるところに聖霊が働き、主が証しされ、それが結果として伝道となります。またその結果として、敵対していた者が和解し、共に礼拝を献げることとなります。

そして正しい礼拝が行われるとき、教会は広がりを見せます。強国であるエジプトとアッシリアは、世界を緊張と分裂を引き起こしていました(23)。しかし主を礼拝する民が集うとき、それらの分裂が解消され、一人の人のように、エジプト人もアッシリア人も共に礼拝を献げるときが到来します。

ですから主なる神によって救いに導かれた私たちに求められていることは、第一に伝道することではなく、まず主なる神に正しい礼拝を献げることです。

つまり私たちは、ここ大宮教会で礼拝を献げているのですが、点ではなく、この点は空間的な広がりを見せるのです。一つの民・一つの世界に、唯一なる主なる神がおられるだけで、エジプトもアッシリアもイスラエルも一つになり、主の祝福に満たされます(25)。これがまさに2:4で語られてきたことが実現するときです。

このときの神礼拝の様子が黙示録において語られています(黙示録7:9~12)。「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、……大声でこう叫んだ。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン。」

18章でクシュ（エチオピア）、19章においてエジプトについて語られてきました。クシュから万軍の主が示され、エジプトもアッシリアもイスラエルと共に主に従い、主を祝福する終末の状況を確認してきました。

20章では、アシュドドについて語られていきますが、ここにおいてもエジプト、クシュのことが語られていきます。つまりその日における終末の出来事が起こる前に、エジプトやクシュに対する裁きが行われるのであり、悔い改めを迫っています。

アシュドドはペリシテにあり、ガザの北、地中海に面した小さな町であり（巻末地図4）、新約ではアゾト（使徒8:40、巻末地図6）です。

BC720年に北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた後、713年に、エジプトの影響力の下、アシュドドはアッシリアに対する反乱を行います。しかし、711年になると、アシュドドはアッシリアに屈し、アッシリアの傀儡（かいらい）政権となります。しかしなおもエジプトはアシュドドに働きかけ、アシュドドはユダ・エドム・モアブと共にエジプトの同盟に加わります。そしてアッシリアに対する反乱を継続します。

しかし、アッシリアの王サルゴンは將軍タルタンを送り、アシュドドはアッシリアに屈し、アッシリアに占領されます(1)。

主なる神は、エジプト・クシュ・アシュドドに対する警告を発するにあたり、まず預言者イザヤに命じます(2)。「腰から粗布を取り去り、足から履物を脱いで歩け」。粗布をまとうこと自体、預言者として遜り、人々に対して自らの姿を顧み、悔い改めを迫る姿でした。しかし主は、粗布をすら脱ぎ捨て、履き物も脱げと語られます。非常に恥らしい格好です。この預言者の姿こそ、エジプト・クシュの前兆であると、主は語られます(3)。

こうした裸の姿は、捕虜とされる捕囚の民・奴隷の姿そのものです(3)。つまり、エジプト・クシュといった強国が、戦いに敗れ、捕囚となり、奴隷として買い取られていくことを物語っています。

そして、イザヤは裸になることを3年間課せられます(3)。この3年という期間は、主が行われる裁きの確実性を語っています。

そして、「彼らは自分たちの望みをかけていたクシュのゆえに、誇りとしていた

エジプトのゆえに、恐れと恥をこうむるであろう」と語るとおり、アシュドドもまた、クシュやエジプトに依り頼んでいた故に、同じような恥を被ります(5)。

主なる神が、なぜエジプトを裁き、クシュを裁き、アシュドドを裁くのか、彼ら自身が主の御前に立ち、主の御言葉・主の律法に照らして、自らを省みることが求められています。力を誇り、武力で自国の民、そして他国を支配しようとするとき、隣人を愛することなど行わず、殺し・姦淫し・盗み・偽証し・さらにむさぼるのです。それ故に、主なる神は彼らを滅ぼし、囚われの身・奴隷に差し出されるのです。

「その日には、この海辺の住民は言う。『見よ、アッシリアの王から救われようと助けを求めて逃げ、望みをかけていたものがこの有様なら、我々はどのように逃げ延びえようか』(6)。海辺の住民とは、アシュドド周辺のペリシテのアシュケロン、ガザのことですが、イザヤが遣わされたユダの人々に向けて語られています。このとき、すでに北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされており、さらにアシュドド・エジプト・クシュとなれば、ユダも他人事で済ましてはなりません。

今、世界を見渡すと、力をもって支配しようとして、戦争・武力による自国民の抑圧・迫害が行われています。しかしイザヤの預言により語り、世界は主なる神が支配しておられること、それが実現することが語っています。今の時代、神はいなくなったわけではありません。当時の人々も同じように、神の支配を忘れ、偶像に頼り、自らの力で世界を支配しようとしていたのです。

主なる神が、今に生きる私たちに語りかけていることは、世界の状況をただ見てはなりません。他国で起こっていることが、日本においても起こる可能性があること、さらにここに潜む罪は、私たち自身の姿であることを顧みなければなりません。私たちは、今も生きて働く主の支配の下に、生命が与えられ、神の恵みにより、キリストの十字架の御業が主を信じる私たちに転嫁され、罪が赦され、神の子とされています。ただ神を信じるのではなく、主の御力にひれ伏し、罪を悔い改め、遜り、主への信仰に生きることが求められています。

今日の御言葉では、バビロンが滅ぼされ、偶像の神々の像も砕かれ、地に落ちることにより、主の御支配が明らかになります。

最初、「海の荒れ野についての託宣」と語ります。イザヤ書では「託宣」という言葉が繰り返し語られます(13:1, 14:28, 15:1, 17:1, 19:1)です。「海の荒れ野」が、バビロンの地域、ペルシャ湾を指すと、一般的に注解されてきています。

「ネゲブに吹き荒れるつむじ風のように彼は来る 荒れ野から、恐ろしい地から」(1)では、バビロンが周辺諸国、さらにはユダを攻めてくることを語っています。

こうした状況の中、主がイザヤに預言を託します。最初は、バビロンの不法について語っているようです。それに対して、エラムやメディアといったペルシャのキュロスの軍隊が攻め上ってくることにより、バビロンの不法を終わらせることを、主は預言されます(2)。

ここで、主は「わたしは呻きをすべて終わらせる」と語り、アッシリアの恐怖にあるユダに対する主の愛が示されています。

しかしこれは激しい幻です(2)。そして、預言者イザヤに苦痛が襲います(3)。このときイザヤは「それゆえ」と語ります。なぜ「それゆえ」なのか？なぜ、イザヤに腰の痛みが襲ったのか？謎だらけです。バビロンが滅びることにより、ユダは解放され、苦痛から解放されるはずです。

このとき、主なる神が行うバビロンに対する裁きの恐ろしさ、すさまじさを、主はイザヤの体全体に体験させ、その迫力、主なる神の思いを、イスラエルの人々、さらには滅びの対象となるバビロンの人たちにも迫っているのではないのでしょうか。

そしてイザヤは「わが心は乱れ、おののきが、わたしを打ちのめす」と語ります(3)。イザヤにとっては、ユダの人々に悔い改めを迫ることで、人々から蔑まれ、迫害を受けていたと考えられます。さらには20章では、裸になり、エジプトとクシュに対する裁きを語り続けることが強いられました。そこまで、主の召しに従ってきたイザヤが、心が乱れ、おののくと語ります。

イザヤ自身が「楽しみにしていた夕暮れ」も、これから迫ってくる裁きのため、「恐怖に突き落とされ」ます(4)。

しかしバビロンの人々は、誇り高ぶり、「宴は広げられ、座は整えられ 人々は飲み食いしていました」(5)。そして、新たな征服のために、軍隊に鼓舞している状況が語られているようです(5)。

しかし、主なる神による裁きが迫っています。「見張りを立てる」とは、誰が何に向かって見張りの立てるのでしょうか？(6)

①まだ滅びが迫っていることに気がつかないバビロンが、ユダを攻めてくるかか？  
②バビロンが、これから主の裁きが迫ってくるために、備えのために見張りを立てよと語っているのか？

③主がバビロンに攻めてきて、激しい戦いにより滅ぼしますが、その状況を、イザヤが第三者的に「見届けよ」とのメッセージが語られているのか。

私は③のように解釈します。

「二頭立ての戦車」(7)がやってきます。主がエラムやメディアの軍隊によって攻めて来ます。これは、スポーツ中継をアナウンサーが実況しているように聞こえます。

このときにイザヤはバビロンが滅ぶことを見届けます。主なる神が、エラム、メディアを用いてバビロンを裁き、滅ぼします。

「倒れた、倒れた、バビロンが。

神々の像はすべて砕かれ、地に落ちた。」ユダにとってバビロンが滅びることは、信じられないことです。しかし主は、アッシリア・ペリシテ・モアブ・エジプト・クシュと周辺諸国を次々と滅ぼし、そして最後にバビロンの裁きを語ります(13章以降)。

今ユダは、北イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、自分たちも滅ぼされることに脅えています。そうした最中バビロンもまた主の裁きもたらされることが語られます。

こうしたときに、主はユダに対して、「打たれ、踏みにじられたわたしの民よ」(10)と語りかけられます。アッシリアが怖いから、バビロンに付くではダメなんだ！との、主からの強烈なメッセージです。イザヤはこのことを、自らの体で受け止め、それをユダの民に語りかけます。

そして、イザヤは最後に、自らの言葉で、ユダの民に語りかけます。人や力に依り頼む前に、誰が天地万物を創造され、誰がすべてを支配しておられるのか、私たちは生ける主なる神を忘れてはなりません。